



長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。公益財団法人日本尊厳死協会前副理事長。映画『痛くない死に方』『けったいな町医者』をはじめ、出版やインターネット配信などさまざまなメディアで長年の町医者経験を活かした医療情報を発信する傍ら、ときどき音楽ライブも行っている。

386 キャスター 小倉智昭

## 小倉節を、もう一度聞きたい

今でこそ「死」の問題は、どのテレビ番組でも普通に扱われるようになりましたが、一昔前、特に朝の情報番組では「死を扱うなんてとんでもない!」という反応でした。そこに風穴を開けてくれたのは、2013年8月の『とくダネ!』(フジテレビ)です。自宅で穏やかに死ぬために何が大切かを丁寧に取材してください、僕の患者さんも、僕も出演しました。

それまでの司会とは違う立ち位置で、歯に衣(きぬ)着せずどんなタブーにも挑戦していった『とくダネ!』のキャスター、小倉智昭さんが、東京都内の自宅で9日に死去されました。享年77。

長年糖尿病を患っていた小倉さんが膀胱(ぼうこう)がんと診断されたのは、16年、68歳のとき。尿の中

に血が混じていたことで異変に気がついたといいます。内視鏡手術を受けたものの、医師からは「状態がかなり悪いから膀胱の全摘を」と勧められます。男性機能を失うことに未練があり逡巡(しゅんじゆん)していましたが、2年後にポリープから大出血をしたことから全摘手術。小腸を60センチ切って、代用膀胱を造設しました。

女性よりも男性の方が3倍罹患(りかん)率が高い膀胱がん。小倉さんが仰ったように男性機能と直結するためなかなか話づらい、聞きづらい病気です。しかし小倉さんは、「だからこそ治療の経過を話していかなければ」と、その後、病状を赤裸々にお話するように。

「勃起神経は切ったが射精神経は残っている。ピュッと出たのがオシ

ッコだったりして...そういうことは医師も知らないから、泌尿器の学会に呼ばれて講演した」

「常に尿漏れパッドをあてて生活している」などというお話を聞いたときは、驚きました。いちばん話しづらいことを、キャスターの使命として伝えることで同じ闘病をしている人たちに勇気を与え、医師たちにも学びを与えてくれました。



2021年3月に『とくダネ!』を卒業。その年の9月には、がんが肺に転移しステージ4であることが判明しました。それでも、テレビやラジオの仕事が続けられていたのも同年代には大きな励みとなったことでしょう。

そして昨年12月には、腎盂がんと診断され、左の腎臓を摘出。免疫チェックポイント阻害薬であるキイトルーダにも挑戦され、その副作用を含め、治療の経過を断続的に公表しておられました。

僕は『がんは人生を二度生きられる』(青春出版社)という本を書いています。小倉さんは治療経過や死生観を伝え続けることで、キャスター人生をまさに二度生きた。

最近、地上波の番組は萎縮して市民より政府の顔色ばかり見ているように思います。「何なんだ? この国は!」という、あの小倉節を、もう一度聞きたいです。